

## 特集 豊かさと安全とエネルギー

講師

●大宅 映子 氏

(評論家・公益財団法人大宅壮一文庫理事長)



### ◆はじめに

皆さま、こんにちは。大宅映子です。まず自己紹介がてら、私のスタンスなどをお話したいと思っています。

私は、評論家であった父の大宅壮一が残した雑誌コレクションを所蔵する図書館、「大宅壮一文庫」の理事長もしています。最近、「大宅壮一文庫」というのは、岩波文庫とか文春文庫とか、ああいうものですか？」と聞かれて、「エッ」とびっくりしています。父が他界したのは1970年で、もう46年前のことですから、大宅壮一を知らない方がいても仕方がないことかなと思います。

### ◆「一億総白痴化」などの新語を残した父、大宅壮一

父は、1900年に大阪の高槻市で醤油屋の三男坊として生まれました。父親は酒飲みで身上をつぶしてしまい、父の壮一は毎朝、醤油の仕込みをしてから中学校へ行って、帰ってきたらそ

の醤油を配達する、という二宮金次郎みたいな生活を送っていました。

その頃から「何とか論」というのを論じるのが好きだったようです。醤油屋の仕事が忙しいものですから、学校を時々休まなければならなくて、そこで「何月何日、頭痛につき」とか「何月何日、腹痛につき」とか書いて、判子は全部自分で管理しているため、判子をついたものを何枚も束にしていたのです。ある時、その束を落として、先生に見つかってしまい、「何だ、これは」と言われて、次の日に『隔日登校論』という論文を先生に提出したそうです。「学校なんか一日おきでいいんじゃないか。そうしたら生徒も2倍入れられるんじゃないか」といった内容のものでした。

父が富山県で行われた出版社の講演会で講師を務めた時に、母を見初めました。母の父親は富山県の中学校の校長先生で、漢学者でもあり、兄は医者という堅い家の娘で、母自身もその三カ月くらい前まで小学校の先生を七年間やっていました。その頃の小学校の先生は、教諭ではなく「訓導」と呼ばれて、普通の人とは別の人格を求められるくらいの職業でした。

母は「何とか小町」と言われる、まあまあ美形で、いまの皇后陛下美智子さまのお母さまにちょっと似ているという感じでした。

講演終了後に講師を囲んで職業婦人たちと座談会が予定されており、母はその時、おでこにおできができて、絆創膏を貼っていて、父が座談会に「あの絆創膏を呼べ」と指示したそうです。数日後には正式に地元の有名人を仲人に立てて「お嫁さんにください」ということで、婚約が整い、めでたく富山県で結婚式を挙げました。

戦争中は筆を折りまして、戦後もしばらくは書かないでいました。何をしていたかという、お百姓をしていました。私は末っ子で、上に兄と2人の姉がいて、これを全部食わせなければいけないからと、戦争中に土地をいっぱい買いました。いま大宅壮一文庫があるところもそのうちの一つですが、当時、ドイツのライカのカメラを1台売ると300坪

の土地が買えたのです。それを近所のお百姓さんに指導してもらって全部開墾して、米や麦、野菜、それに桃などの果物をつくり、山羊や豚も飼っていました。鶏も当然飼っていて、お客さんが来るたびに鶏が1羽ずつ減るのです。心当たりがある方は多いかと思いますが、当時はそういう生活をしていました。

そして昭和23年くらいから、猿取哲（サルトルテツ）というペンネームで再び書き始めました。哲学者のサルトルから取った名前、私はあまりいいネーミングとは思わないのですけれども、「あれは誰だ」という話になって、「ああ、あれが大宅壮一か」と。それで「大宅壮一でもう一回食っていけるかな」となって、またメディアに登場しました。

その頃にテレビの放送が始まりました。父はいろいろな新語をつくりましたが、一番有名なのは「一億総白痴化」です。テレビのことを、そう言いました。テレビ放送が始まって半年くらいで言ったところが、「さすが大宅壮一だな」と私は思っています。

テレビというのは目から入ってきて刺激がものすごく強く、茶の間にいながらにして、いろいろな情報がバンバン入ってきて、考える暇を与えません。しかも、視聴率競争があるので、どんどん刺激が強くなります。父は「人間というのは刺激をより求めるものである、見ているのは、ばかばかしいと思いついて、つい見てしまうのが人間だ」と書いて

いるのです。「それに慣らされてしまうと、考えることをしなくなつて、みんながどんどん白痴になるよ」ということです。白痴化の「化」というのは傾向を表す言葉で、警句だったわけですが、今は、この「化」がもう取れてしまったのではないかなと、私は何年も前から思っています。

父は人間の裏側のどろどろしたところが好きで、きれいな単行本より、インキつばい雑誌などのなかに人間を解析していく面白い情報があると考えていました。私の旦那が婚約中に、うちへ遊びにきた時、父が赤鉛筆を持って娯楽週刊誌を読んでいるのを見て、びっくりした、といまだにっています。

### ◆父から学んだ物事の見方、事実を追求し、自分の意見をつくり上げる◆

父は、自分がいろいろ書く時には、「資料、データとか情報というのは集めただけではだめ、使えなくては意味がない」と言つて、人を集めて週刊誌、雑誌に書いてある記事を分解して、書き手とか、出てくるテーマとか、人の名前とかを全部カード化して、いろいろなところから引けるようにしていました。父は、これを「雑草文庫」と称していました。自分の生きた大正史をライフワークにするのだと言つて、資料をいっぱい集めていたの

ですが、1967年に大事なひとり息子が亡くなつてしまったものですから、ちよつと生きがいを無くしてしまい、それと、大正史を書き始めたら、あまりに広がり過ぎてどうしていいかわからなくなつてしまつたようで、体力が落ちていき、気力も落ちて、1970年に他界しました。

「集めた雑誌類をどこか一社のものにしないでくれ。マスコミの共有物として活用してもらいたい」というのが父の遺言だったので、母は父が亡くなつてすぐ走り回りまして、いろいろな新聞社や出版社に会員になつていただいて、財団法人大宅壮一文庫として、皆さんに使っていただくようにしたわけです。

テレビ番組でも、大宅壮一文庫のデータはいろいろ使われています。例えば田中角栄に関するものなど、さまざまな資料が膨大にありますし、事件などが起こると、大宅壮一文庫へ行けば何か切り口が見つかるということで、いまメディアで活躍している人で大宅壮一文庫にお世話にならなかった人はいないくらいです。

その大宅壮一文庫の利用者が減ってきています。なぜかという、一つはインターネットです。いながらにして大方の情報は手に入ってしまうわけです。ですから、ルポライターや雑誌の記者の人たちも大宅壮一文庫までわざわざ体を運んだり、頼んでFAXを送つ

でもらったりしなくても、7割方の原稿は書いてしまうわけです。それからテレビ局がコスト削減で、企画ものをあまりやらなくなった。この頃テレビをご覧になって、そう思いませんか。タレントがどこかの駅で降りて、ブラブラ歩いて誰かに出会ってというような、ああいう番組にはあまりコストがかかりません。その二つの理由で利用者が減っているわけです。

でも、体を運んで実物の週刊誌などを見ると、その時代が本当に分かるわけです。印刷の技術や紙質がどんなに悪かったかとか、ものすごく面白い広告が載っているとかです。いくらテレビ電話で会議ができて、やはり一対一で会って話をしたほうがいいというのと同じように、この文庫には存在意義があると思っています。それに、母がきちんと仕立て上げたものを私の代でつぶしてしまったら、あの世に行った時に何を言われるか分からないので、もっと早くデータが出せるようにといった工夫をしているところです。

子供の頃、うちには毎日、雑誌が束になってくるし、新聞は4紙くらい取っていました。小学校4年生くらいの時に、父が新聞を2紙並べて、「映子、これを見てみる。同じ事件でも書き方がこんなに違うだろう。だから一つの情報だけを鵜呑みにして信じるんじゃないぞ。物事というのは縦、横、斜めから見えて、自分で考えて、自分で判断して、自分の意

見をつくり上げる。事実を見つけるためには努力が必要なんだ。キャスターが言っていたからといって、そのまま右から左で自分の意見みたいな顔をして言うな」と、徹底的に叩き込まれました。

ですから、いまでも何かが起こると、東京の目で見ただけでなく、地方の目で見たらどうなるだろう、日本全体の目で見たらどうなるだろう、世界の目で見たらどうなるだろう、さらに地球規模で見たら、宇宙から見たらと、いつも大きな目で物事を見るようにしています。その一方で、個人の目も大切にしています。よく「女の目」と言われるのですけれども、私の考え方が女の目かどうかは、私は男をやったことがないから分かりません。女固有の意見なのか、大宅映子固有の意見なのか、私は自分でよく分からないので、「女の目から見て」と言われると、「すみません、それはよく分かりません」と答えています。私がテレビに出始めた時、一つのコーナーをもらってレポーターとして千葉県へ行きました。ある人が飼っていたライオンの子供が逃げたのですが、これを女の目で見ると斬れと言われても、「それは違うな」と思います。

ただ、私がテレビに出だした時代、1979年頃は男の人は仕事ばかりで、家のことなどあまりやらない人たちが多く、生活感がありません。それで私は「生活者として」とい

う言い方を一時していました。でも、この「生活者」というのを英語に訳した場合、「生きている人」としか訳しようがなく、それでは男でも女でもありません。それで「個人として」というように、私はスタンスを決めているのです。ですから、「大きな鳥の目と蟻の目」と言ってもいいし、「客観的な目と皮膚感覚の目」と言ってもいいのですが、いつも必ず両方で見ながら判断をしているつもりです。

2011年3月11日の東日本大震災から3カ月くらい後、「反原発だ」、「原子力発電はだめだ」と言われている嵐のなか、こうした両方の目で判断して、私は雑誌で「原子力発電は必要だ」という論を張りました。ものすごい反応があるかなと思ったら、私には何にも矢は飛んできませんでした。いまでもテレビ番組で他の人と違う意見を言うことが多くて、ご覧になっている方にはお分かりいただけるかと思いますが、孤軍奮闘という感じがします。居心地が悪いのです。司会者の方が、わざわざ「これに関して大宅さんはご意見が違うから」と言って振ってきたりもします。

### ◆活字の中で育ち、大学へ、アメリカへ、そしてテレビの世界へ

活字の中で育ったので、活字を読む力、速さだけはすぐくて、それはとても助かってい

ます。「嘘だろう」とよく言われるのですが、本は1ページごとに読むという感じですが、1ページ斜めにシュツと読めるんです。結婚した当時、旦那に「おまえ、見ているだけで読んでないだろう」と言われました。旦那は上から下まで一行ずつ読むので、「そんなふうに読んでいたら、一冊読むのに一生かかっちゃうじゃない。じゃあ、何が書いてあったか質問してくれてもいいよ」みたいなことを言っていたのですけれども、それは慣れです。必要な字が目飛び込んでくれるので、時間をかけずに読み飛ばします。その代わりにじっくり読んで「この言葉はいいなあ」とか、そういうのは全然ないです。ただ量だけに入っているという感じです。

私は大学を出てアメリカに行きたかったのですが、父は行かせてくれませんでした。あの人は見かけによらず気が小さくて、末っ子の私をアメリカに出すのは恐かったみたいです。それでも、「アメリカに骨を埋める気ならいい」というところまで言質を取ったのですが、「アメリカで金髪の胸毛と結婚するというのはもなんだしなあ」と。その当時、私の尊敬する女性の評論家がいらしたのですが、一生独身で猫に遺産を残しました。「猫に遺産もいやだしなあ」と、結局は父の言いなりになりました。ですから、その後進んだ国際基督教大学は、私にとってはアメリカの『ようなもの』だったのです。「行っても途

中で出りやいいや」と思っていたのですが、あの学校は人数も少ないし、なかなか楽しかったものですから、つい4年までいてしまいました。

それで卒業するのですが、1963年当時、4年制の大学を出た女子の就職口はほとんどありませんでした。私は役人もいやだったし、学校の先生もいやだったし、普通に会社に入って、できれば海外に行きたいと思っていたのですが、そんなのは全然なかったわけです。でも、家にいて家事手伝いとか花嫁修業、そんな似合わないものはないでしょう。姉たちは二人とも母に似て美少女だったものですから、21、22歳で結婚したのですけれども、私は一人だけ父に似ていて、お客さんが来ると、10人が10人「下のお嬢さんはお父さまそっくり」と言うのです。そのたびに私はふくれ切っていました。でも、それが良かったのです。「私には玉の輿なんてものはあるわけない」と小さい頃から刷り込まれていたもので、「自分の道は自分で切り開かなければいけない」と自立が自然にできたわけです。

いろいろなところに就職活動をしたのですが、翻訳の仕事くらいしかありませんでした。翻訳はやる気は全然ないし、「根なし草は困るな」と思っていたら、ちょうどその年に国際基督教大学に大学院ができたものですから、これを受けて入ることができまして、「すみません、もう少しすねをかじらせていただきます」と母に報告しました。母は私をまじ

まじと見て、「あなた、一体どうする気？」と聞きました。「どうする気って、何が？」と言うと、「そうじゃなくても、あなたは背が高すぎるし（170センチあります）、ブスだし、十分生意気なうえに大学院なんていうのが付いたら、お母さん、あなたをお見合いで売る力はないわよ」と言われたのです。「分かっています。私も自分がお見合いで売れる玉とは思っておりません。でも、私は男が200人も300人も欲しいと言っているわけではなく、この世の中に一人、もの好きがいてくれりゃあいいんです」と啖呵を切りました。

ところが、せっかく進んだ大学院でしたが、小さな大学院で、先生一人に生徒一人みたいなもので、先生もあくびをしているし、こちらもあくびをしている。面白くも何ともないのです。それで、日本で2番目にできたPR会社というのを紹介していただき、そこに就職しました。当時、PR会社はまだ2社しかなくて、「PRというのは『Love me』（好きになってください）です。広告は『Buy me』（買ってください）です。これはそれぞれ手法が違います」みたいなことを言われて入りました。

その会社に8月に入って、そこで出会った男と翌年の2月に結婚しました。私は身のほどが分かっていますので、私のことをいいなんて言う男はそう次から次に出てくるわけが

ないと思っていましたから、出てきたら早く手を打ったほうがいい、その謙虚さでずうっと共稼ぎをしてきました。

結婚をして、親から「ぼちぼち孫を」と言われた時に、私はアメリカを見ていないと何か顔を洗っていないみたいになすっきりしない感じがしたものですから、旦那は仕事をつかって、私は会社を辞めて、アメリカへ行きました。それで、あちらを各地ずっと回って帰ってきましたら、神さまは長女を授けてくださいました。

その長女が1歳半くらいまで仕事はせず、家にいましたけれども、私の行動範囲がごく狭くて、だんだん不満が募ってきました。それを私が自覚する前に旦那のほうで察知してくれて、爆発されたら大変だということで、「会社をつくるから、おまえがやってくれ」と引っ張り出してくれたのです。こんなラッキーなことはありません。男の人たちは面白いと思わないかもしれないけれども、私たちは面白いと思うような企画、例えば航空会社と組んで日本中のおいしいものをお家へ配達する「食いしん坊会」というようなことをやっていました。私はそれでよかったのですが、その後、たまたま話がきて、先ほどお話ししたようなレポーターとしてテレビに出るようになったわけです。

### ◆「事故を起こしたから、原子力は即全部廃止」とは乱暴な話

最初に就職したPR会社のクライアント（顧客）の一つが、アメリカの原子力プラントメーカーのゼネラル・エレクトリック（GE）でした。1963年の10月26日に、GEと日本のメーカーが共同でつくった動力試験炉を使って、日本で初めて原子力発電に成功しました。「茨城県の東海村で日本初の原子の火が灯った。こんな素晴らしいことはない。資源のないこの国がやつと生き返れる」と、国を挙げて盛り上がったのです。反原発の人たちは、あの頃の新聞を一度ご覧になったらいいと思います。

でも、私は100%原子力がいいと思っっているわけではありません。もし、いまの時点で「原子力という発電方法があります。ものすごく安く電気を生産できます。ただし、事故が起こった時は大変なことになります。しかも、トイレなきマンション」と昔から言われていて、放射性廃棄物の後始末はできません」と言われたら、私も「やめようよ」と思ったかもしれません。

原子力発電がなければ、それだけの豊かさで済ませてきたと思うのです。その時点で再生可能エネルギーをどれくらい利用できたか分かりませんが、石炭と石油と水力、その範

原子力発電により、人々は便利で豊かな生活を享受してきました。



囲の中でしか生活はできないわけです。原子力発電を手に入れて、それで電気をいっぱいつくって豊かさを享受してきたわけです。人間というのは、一度手に入れた豊かさはなかなか手放せません。「原子力発電で30%の電気が生み出されていれば、30%の豊かさを捨てるから原発をやめてください」という主張だったら、ものすごく分かりやすく、でも、「豊かさはいままで通り欲しいけれども、原発は怖いからいやだ」というのは、成り立たないと思います。

福島第一原子力発電所の事故以降、原子力が悪になってしまつて、「すぐに、全部なくす」みたいな風潮になりました。でも、原子力発電所というのは1基ずつ立地の条件も違えば、つくり方もいろいろ違います。それに、これまで豊かな生活を送るうえでさんざんお世話になっておいて、「事故を起こしたから、全員クビ」というのは、どう考えても乱暴な話です。せつかくだったら、安全の技術を

磨き上げながら使つて、寿命を全うしてもらい、「お疲れさまでした。ありがとうございました」と言つて看取りたいと、私は思っています。

新しい原子力発電所をこれからも、どんどんつくるということに関しては、放射性廃棄物の処理方法など、先の見通しができた時点でないとちよつと躊躇する、というのが私のスタンスです。これは普通に当たり前のスタンスではないかと思いますが、娘とはしょっちゅう論争しています。「ママはいいわよ、もう75歳なんだから。でも、うちには娘がいまから」とすぐに言ってくるのです。「ママはだいたい政府寄りだ」とか、「企業寄りだ」とかいうことで大げんかになります。でも、いまの若い人を見ると、あまりにも歴史を知らなさすぎて近視的になっていると思います。日本は原子力発電のおかげで豊かさを手に入れてきた、ということは事実なのです。

ドイツは脱原子力を進めているとか、再生可能エネルギーを積極的に活用しているとか、メディアはいいところだけを切り取って出してきましたけれども、現実はどうでもないこともいっぱいある。メディアの報道にはバイアスがかかっていると、私はいつも思っています。

「科学リテラシー」と言われますけれども、我々一人一人が科学的な知識や考え方をもち



とに判断する能力を身に付ける必要があると思います。ただ、技術情報としての放射線や放射能というのは本当に難しいと思います。例えば、マイクロシーベルトとシーベルトでは桁が幾つ違うか分かりますか。1ミリメートルは1メートルの1000分の1ですが、同じように、1ミリシーベルトは1シーベルトの1000分の1。さらに1マイクロシーベルトは1ミリシーベルトの1000分の1です。ですから、マイクロシーベルトは、マイクロもミリもつかないシーベルトの百万分の1。6桁も違うわけです。頭の中ではなかなかイメージがわかないと思いますが、桁が一つ違うだけでも全然違う話なのに、「そのへんのことはよく分からない」、みたいなことで物事が動いてしまっているのは非常に怖いのです。

私の友達で放射線の専門の人がいて、これはきちんと説明して理解してもらわなければいけないということで、放射線や放射能の根本的な基礎知識をいろいろなところで紹介したいとメディアに持ち込んでも、ほとんど取り上げられません。でも、どこかで異常な野菜ができたとか、子供の甲状腺がどうかというと、メディアはすぐに飛びつくわけです。昔からメディアというのは、「犬が人にかみついてもニュースにはならない。人が犬にかみついて初めてニュースになる」という体質を持っているわけですから、仕方がない

かもしれません、父が言っていたように、いまの人はそれをわりと素直に受け入れたがる節がある。ちよつと疑ってみるとか、自分で調べてみるといった努力に欠けている気がします。

私は、いまの状態のままで原子力発電所の再稼働を進めていくのは、ちよつと引つかります。というのは、事故の真相がみんなの共有になっていない。事故の原因などを調べるために政府や国会、民間など幾つもの事故調査委員会ができて、いろいろな報告がされています。原因は地震か津波かという点、地震では大丈夫だったのだと私は理解していますけれども、こうしたことが共有されていません。

また、東北電力の女川原子力発電所はちよつと高めの敷地につくっていたので津波の影響もなかった、周辺住民の方たちの避難所にもなっていた、というようなことも、私は資料などをいただいて知っています、一般の人はほとん

敷地の高さを上げて建てられた女川原子力発電所は、津波を免れ、  
周辺住民の一時避難所にもなりました。



ど知らないのです。そういう話をもっとみんなの共有のものにする必要があります。そのうえで、原子力に向き合っていかなければいけないのではないかと思います。専門家の皆さんがどうお考えなのかはよく分かりませんが、私はそう思っています。

### ◆「リスクがある」と言えない空気が生み出した安全神話

一番の問題点は安全の話です。日本では、よく「安全・安心」と言いますが、これは全く別のものです。「安全」は確率の問題で、科学者の間では、「絶対100%安全などということはない。99・9999%の安全を確保しても、0・0001%の何かはある可能性がある」というのが共通認識だということです。一方、「安心」はいくら専門家が言葉を重ねて説明しても、「だけど、私は安心できない」と言われたら、もうどうしようもないという話です。ですから、「安全」というものに対しての考え方を、徹底しなくてはならないと思っています。

私自身、事故の後、専門家と称する人たちが何と勝手にいろいろなことを言うのだろうと思ったのです。全く正反対のことを言う人たちがいるわけです。それをどうにか統一できないものなのかと思い、「客観的事実みたいなものはないのですか？」といういろいろな

に聞いて歩きました。学術会議の方から、「科学者というのは、人と違うことをやって初めて認められるんだ。科学者が集まって共通の意見を出すということはあり得ない」と言われた時に、「ああ、そうか。これは大変だ。誰かが物差しをつくってくれたら楽なのに。我々一人一人が本当に強くなって、自分で判断力、基礎知識を持たなければだめなんだ」と思ったのです。海外では、科学に關していろいろな助言をするアドバイザーがいて、ある程度のまともな意見を出す国もあるようです。できることなら日本もそうできたらいいのになと思っています。

いま、原子力だけではなく、科学とか専門家に対する不信があります。経済評論家も、こちらとあちらでは全然違うことを言うじゃないですか。財政赤字を問題視する人もいれば、「あんなものは家庭の中で貸し借りしているみたいなものだから、全然大丈夫だ」と言う人もいます。もっとすごいのは健康情報で、「牛乳を飲んでほだめだ」と言う人がいれば、「牛乳を飲まなきゃだめだ」と言う人がいる。さらには、「牛肉を食べたら100歳まで生きられる」、一方で「牛肉はよろしくない」、ダイエットにはこういう方法があるなど、毎日のように違う論が現れてくる。人と違うことを言わないと取り上げてもらえないということかもしれません、どうなっているのかと思っています。何を信じていいか分か

らない。となれば、やはり自ら情報源に突っ込んでいって、自分で納得して、自分で判断するしかないのだろうと思うのです。

原子力における問題は、科学者への不信、それから放射能に対する不安です。これがいつまでたっても拭えない。その要因の一つは、そのことへの知識が不足していることだと思います。「おれのおやじは広島で原爆にあつて被ばくしたけど、96歳まで生きた。そんなもの大丈夫だよ」、という人もいるでしょうけれども、それだけでは説得力にはならないのです。また、低線量の放射線による影響のデータがあまりなくて、「ここまでなら大丈夫です」という言い方が科学的にできないそうです。それができればたぶんもっと楽だろうと思います。

そういう原子力の安全性とか放射線、放射能のことと、電力会社などの隠ぺい体質などへの非難とは分けるべきだと思っているのですが、それがごちゃ混ぜになってしまつて、「だから原子力は、即全部廃止」となるわけです。

やかんのお湯なら、火を消せば自然に冷めますが、原子力発電所は運転を止めたからといってすぐには冷えない。どうやって冷やすか、という問題がある。冷やすための技術も要るわけです。それをいまの反原発の人たちが言うように、一つが悪さをしたら全部ダメ

みたいな話になつてしまうと、すべてが止まつて技術が途絶えてしまう。それに、これだけの事故を起こした国として、世界に対しても、それを乗り越える技術をつくり上げていく責任がある、義務があると私は思っています。もし日本が原子力発電所を全部廃止したとしても、世界には原子力で電気をつくつて、もつともつと経済発展をしたいという国が山のようにあるわけです。さらに、技術というのは廃炉をするためにも必要なわけです。

やはり問題は、根っこにある安全神話です。安全神話というのが本当にあったのかどうか分かりませんが、「安全と言つたじゃないか」というのが反原発の人たちの言い方です。私の卒業した国際基督教大学で教授をされていた科学哲学者の村上陽一郎先生が、こう書いています。「科学者にとつて、技術に100%安全はないのは常識です」。技術の世界では、絶対安全という言葉はあるはずがありません。99・999%の安全が確保できているということは、そこまでやつたとしても0・001%のリスクは覚悟されているということです。ところが、日本社会では「100%安全を保証しろ」となる。保証できると思っているから、それを要求する。「小さくてもリスクはあります。そのリスクに対応するためには、こういう手段を講じなければいけません」ということが言えないような空気が存在する。原子力に対してずうっとそれが底流に流れてきたのだと思います。

ご存知の方がいらつしやるかもしれませんが、原子力発電の使用済みの核燃料をフランスに持って行って再処理してもらい、回収したプルトニウムを船で日本へ持って帰ってきていました。その船に乗り込んだ記者が、〃やっぱりあった安全マニュアル〃という見出しの記事を書いた。「何かあった時のための安全マニュアルがあるということは、安全ではないからだ。この輸送はやっぱり危険だから、やめるべきだ」というような結論に導く記事でした。ジャガイモを運ぶのとは違うのですから、安全マニュアルがあつてしかるべきだと思うのです。村上先生も、「対応策が要するということを発表しにくい社会だ。〃安全神話〃というものが、もしあったとすれば、こうした空気がつくり出したものであろう」と書いていました。

危機管理というのは、「リスクはある」という前提で最悪の事態を想定して、そのリスクの総和をいかに小さくするかを考えるのが、普通だと思うのですが、日本には言霊（ことだま）というのがあります。「もし私が死んだら」と言えは、「そんな縁起の悪いことを」となるように、「もし原子力発電所が爆発したら」といった悪いことは口に出してはいけません。結婚式の忌み言葉とか、いろいろあります。そういう社会のムードがずうっと底に流れている。100%の安全があると考えるのは、「誰かが何かをしてくれるはず」とい

う前提で世の中が動いているということだと思います。

### ◆個人の危険回避能力が、どんどん弱くなっている

もう一つ違う見方をする、誰でもつくれるようなものは先進国がすでにやっていて、後からではもう勝ち目がなく、誰も考えないようなものがたつたものを考え、それを世界市場に出せるようにして初めて生き残れるわけです。そういう意味で、日本が持つ、とがった技術の一つが原子力だと私は思っています。原子力の技術を持っている国は、そうたくさんはありません。日本は、さまざまな原子力技術を蓄積している国として、これから原子力発電所をつくりたい国がたくさんある以上、責任を持ってその技術を伝達しなくてはいけない。電車がひっくり返ったら、「そのま

原子力発電所の建設を望む国に、事故を踏まえた原子力技術を伝達することは日本の役目です。



らせたら大変なことになるということもあります。安全に対する思想そのものも輸出しないではいけません。日本のやらなければいけないことはいっぱいあるのです。

ただ、その日本の安全思想に問題がある。先ほども申し上げましたように、「安全」と「安心」は全く違うのですが、日本は「安全第一」という思想ですとこの国を運営してきました。「危険なものは排除する」。誰かが排除すれば、その危険はなくなつて安全が保たれる、という考えです。

山口二矢という名前を覚えていますか？1960年のことですが、日比谷公会堂で演説をしていた政治家の浅沼稻次郎さんを、この17歳の右翼少年がナイフで刺したのです。この事件の後、子供はナイフを学校に持つてはいけなくなりました。それより前は、みんな自分でナイフを使って鉛筆を削れたのです。ところが、「ナイフは危ないから、学校へ持つてきてはいけません」という話になった。危ないから正しい使い方を教えるのが教育者の役目でしょう。ナイフというものを世界からなくせればいいということはあり得ないのです。

交通安全週間には、登下校の時にPTAのお母さんやお父さんが旗を持って横断歩道のところに立って、車を通さないようにします。それで一週間の交通安全週間が終わったら、

「事故がなくてよかったですね」と言つて、みんなでお酒を飲んだりしているわけです。世界中から車をなくすことはできませんから、車と共存していかなければいけないのです。子供たちがいつも通る道へ行つて、「車があの電柱のところくらいだったら渡つても大丈夫だよ。あれよりこっちに車が来たら、危ないから渡つちゃだめだよ」と教えるのが、大人や学校の役目です。こういった話が山のようにあります。どんどん自分で考えなくていいようにしているということですよ。

アイロンをつけっぱなしにしていたら自動的に切れるし、お鍋も空炊き防止といつて、空炊きや、吹きこぼれたら自然に止まるようになっていきます。いいと思いますか。私は、いいことだけではないと思っています。危険なことに対して自分で考えなくなると、個人の危険回避能力がどんどん弱くなると思うからです。

自動車もそうです。アメリカのテスラ・モーターズという会社がつくった自動運転車に、ついに死亡事故が起きました。前を横切るトラックに反応しなかったのが原因ですが、テスラは、「最終的責任は人間なんだから、きちんと前を向いていてくれなきゃ困る」と言っています。自動になつて何がそんなにうれしいのでしょうか。そんなにうれしくないことを、新しくどんどんやっているわけです。

私が車を運転し始めたのは18歳の時ですから、もう57年前です。日本では、事故が一回起こると、新しく信号が付いたり、右折できたところができなくなったりする。これが日本の交通安全規制です。でも、夜中の真つ暗な時に黒い洋服を着て、信号のない道路を渡って轢かれたら、誰が悪いと思いますか。私はその人も悪いと思うけれども、日本国ではそうではないのです。どうするかというと、堅牢なる中央分離帯をつくる。これではお金がかかるし、個人の危険回避能力はなくなってしまうと思います。人任せになって、自分の身は自分で守る」という根本的なところが欠如してしまうと思うのです。

「落石注意」という看板があります。あれはどうしろというのでしょうか。あれを立ててなくて石にぶつかると、「落石注意」の札がなかったと非難されるから、立ててあるのです。車を運転していたら、避けられるわけではないと思うのですけれども。海などの事故で、「遊泳禁止」の札がなかったからだと非難するのも同じです。「安全というのは、事前に管理者である誰かがきちんと手を差し伸べていれば守れるはずだ」という考えが、日本に浸透してしまっているのです。

何か悪いことが起こった時、その理由は三つあります。自分が悪いか、誰かが悪いか、運が悪いのか、の三つです。この運が悪いのまでどうにかしなければいけないと、いろいろ

しようとしていることが、人間をどんどん弱くしてしまっていると、私は思っています。

### ◆賞味期限や食品添加物・・・神経過敏になりがちな安全意識

私の大嫌いなものに、賞味期限があります。あれは、つくった人が「この日まではおいしく召し上がってくださいね」というものです。消費期限は、お刺身とか生もので、傷んでしまうかもしれないというものです。賞味期限は1日や2日過ぎたからといって、食べたなら胸をかきむしって「アアッ」というものではないのです。以前、あるメーカーが2日か3日賞味期限の過ぎたお菓子を売っていて、ずいぶん叩かれたことがありました。これも娘ともめることなのですが、たまに、ごはんを一緒につくって食べた時に、「ママ、これ賞味期限が切れている」、「だからどうした」、と言い合っているのです。

昔は、賞味期限はなくて、生産年月日を書いてありました。そうしたら、消費者団体の人が「つくられた日付だけでは分からない。いつまでなら大丈夫だ」という期限を書いてくれ」と言い出して、賞味期限が付けられるようになったのです。

もっと変なことがあります。これは科学的な知識、応用力がないという事例の一つですが、和歌山のカレー事件というのがありましたよね。あれでファミレスからカレーが消え

たというのをご存知ですか。世の中のカレーすべてをあの犯人がつくっているわけではありません。あれには本当にびっくりしました。

納豆は体に良いというのは分かります。納豆に含まれているプリン体は尿酸の材料だから、納豆は痛風の原因になると言われるのも分かります。でも、納豆を食べれば痩せるって変じゃないですか。ところが、納豆で痩せると話題になった途端、本当にスーパーやコンビニの棚から納豆が消えました。大企業の部長さんクラスがみんな納豆を買いに走ったのです。「大丈夫かな、この国。どうかしているんじゃないか」と思いました。

いま、「食品の添加物は悪で、自然のものは良い」ということになっていますが、これも思い違いです。例えば、毒を持つトリカブトもキョウチクトウもスズランも、みな自然のものです。この間も、毒のあるスイセンをニラと間違えて食べて中毒になられた方がいました。「自然由来だから安心です」とか、「自然由来だから手に優しいハンドソープ」とか、なんでみんな、すぐそれに乗せられてしまうのだろうと思うのです。無添加と言われると、飛びついてしまう。でも、日本の食品の添加物というのは、きちんと調べた結果で「ここまでなら大丈夫だ」という量が決められていて、実際には、その量の1%くらいしか使われていません。逆に、もし添加物を一切使わなかったら、保存が効かなくて、こん

なに安く食べ物を手に入れることができなくなるのです。

「食べてはいけない何とか」とか、「こんなに危ない何とか」といったタイトルの本を書いて稼いでいる人もいます。パセリやレタスは、みんな健康にいいと思って食べているでしょう。でも、あれにも毒はあるのです。毒があるけれども、もつと体にいい食物繊維とかβカロテンとか、そういうものが含まれているので、どちらが多いかなというところ、いいほうが多いから選んで食べている。

水も塩も砂糖も、たくさん飲んだり食べたりしたら、だめなのです。問題は量です。前にも、かまぼこの漂白剤が発がん物質だといって大騒ぎになりましたが、どのくらいの量で発がんするかというと、トラックに一杯くらいのかまぼこを食べたら、という話であつて、普通、一回に食べるのは数切れですから、全然影響ないわけです。

何でそんなにピリピリするのでしょうか。そのストレスのほうが、絶対にがんの原因になります。これを私は自分で暴論かと思いついていたのですが、いまでは、そのほうが脳も元気になる科学的に証明されているのです。笑うとがんになりにくい、という説がありますけど、それと同じ理屈です。

味の素が叩かれたこともありました。アメリカでは、いまでも「中華料理症候群」と言

われているのですけれども、中華料理は味の素をたくさん使うので、しびれるとか、脳梗塞になるとか、ありとあらゆるものが「味の素のせいだ」みたいな話が1960年代の終わりくらいからアメリカでワーストと出てきました。

最近、NHKの漫画で『英国一家、日本を食べる』という番組があつて、「そんなに体に悪いものを子供には絶対食べさせられない」と言つて味の素に乗り込んでいくと、サトウキビ由来ということで、体に悪いものは全然使っていないわけです。「だけど、あなたたちは味の素が出てくる容器の穴を大きくして、たくさん食べさせようとしたでしょう」というと、味の素は、「お味噌汁に入れる時など、湯気があると出にくくなるため、穴を大きくしたのです」と答えていました。それは本当かどうか私もよく分かりませんが、これも、マーケティングの話で必ず出てくることです。2000年にアメリカでも国連でも、「あれはしびれるとか、そういう悪さはしない。毒ではない」としているのですが、いまだにそう思っている人は世界にいっぱいいるということです。

それと同じように、放射線や放射能に関しては、多くの人が強い不安と恐怖を持っているわけです。私もいろいろな勉強会や会合を開いたりしていますが、「シーベルト、ミリシーベルト、さらにベクレルと、単位がなんだか分からない」と言われることが多くて、

そうした基礎的なことは何十回でも繰り返し、みんなに分かつてもらうようにしてはいけないと思います。それと、日常生活といつも対比させたいうえで理解してもらうほうがいいと思います。せっかく学ぶチャンスがあつたにもかかわらず、ほとんどみんな知らないままです。もちろんメディアに持つていてもなかなか載せてくれないということは分かっていますが、専門家の人たちには、それを仕事としてしっかりとやる責任があるのではないかと思っています。

## ◆「知らないことが、恥ではない時代」、日本の先行きは大丈夫なのか

私も専門家不信に陥っていますし、科学というものをどこまで信じていいのかというのでも分からないので、自分が学んで強くなるしかないと思うのですが、経済協力開発機構（OECD）では15歳の子供たちに2年おきにいろいろな調査をしています。もっと続けてほしいのですが、2002年で止まってしまっています。

また、大人を対象にした科学技術の基礎知識、科学技術基礎概念の理解度というテストも行われています。11問あるのですけれども、日本の正答率はOECD17カ国中で何位だと思えますか。13位です。スウェーデンが正答率73%で1位、以下、オランダ、フィンラ



ンド、デンマーク、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、オーストリア、ドイツ、ルクセンブルグ、ベルギー、そして日本です。日本より下は、スペインとアイルランドとギリシャとポルトガルです。

では、何問分かりますか。○か×を付けてください。

1. 地球の中心部は非常に高温である。
2. 全ての放射能は人工的につくられたものである。
3. 我々が呼吸に使っている酸素は植物からつくられたものである。
4. 赤ちゃんが男の子になるか女の子になるかを決めるのは父親の遺伝子である。
5. レーザーは音波を集中することで得られる。
6. 電子の大きさは原子の大きさより小さい。
7. 抗生物質はバクテリア同様ウイルスも殺す。
8. 大陸は何万年もかけて移動しており、これからも移動するだろう。
9. 現在の人類は原始的な動物から進化したものである。
10. ごく初期の人類は恐竜と同時代に生きていた。
11. 放射能に汚染された牛乳は沸騰させれば安全である。

この中に放射能関係の設問が複数あるのに私も驚いたのですが、さあ、皆さんは幾つできましたでしょうか。

正解は、1ー○ 2ー× 3ー○ 4ー○ 5ー× 6ー○ 7ー× 8ー○ 9ー○  
10ー× 11ー×で、日本の正答率は54%でした。科学だけに限らず、日本人の基礎知識が昔に比べてどんどん下がっているのではないかと思います。

私が出ているテレビ番組では、この頃は若い女性を出したがるので、ひしひしと「クビだ」と言われる時が近づいているのを感じています。彼女たちはいいお嬢さんたちだし、世界中を股にかけて飛び回っていたり、私がやっていない体験をしていたり、それに堂々としていて、しゃべりはうまい。ただ、昔のVTRが出てきて、例えば安倍首相のお父さんが映って、「安倍総理のお父さんよ」と言う、「エーッ!」というのです。私は、吉田茂から生で知っているのですから・・・知らないきやいけなくはないけれども、やはり水面下にどれだけの情報と知識を持っているかによって判断力が変わるのではないかと思うのです。

この頃の人は、知らないことが恥ではないから、知らなくても「で？」みたいなことを言われてしまう。私たちの年代だと、若い頃に大人の会話の中で知らないことが出てきた

ら、その時は「ふんふん」と知っているふりをしておいて、あわてて調べて、次の時から  
はきちんとそれに参加する、というような努力をしたものですが、いまの若い人は  
全員ではありませんが、それが足りないように感じます。

私の一番の「しゃくの種」は、いまの「さとり世代」です。さとり世代というから、80  
歳過ぎのおじいさんとか、おばあさんかと思ったら、若い人のことをさとり世代と言うん  
だそうです。もう悟り切ってしまつて、何にもしたくないし、お金も欲しくないし、海外  
も行きたくない。何が楽しくて生きているのだらうと思つてしまいます。

そういう人たちが私たちに向かって、「先生たちの時代はよかったですよね。頑張れば  
結果がついてきたから」と言うけれども、違います。確かに後ろを見れば、頑張った結果  
が出ています。だけど、私たちが頑張っていた時というのは、結果が出るだらうと思つて  
頑張ったのではないのです。食えないからみんな頑張つて働いたし、何かやらざるを得な  
かったわけです。でも、彼らから「先生たちはきちんとやったらやっただけのことが達成  
できたのだから、うらやましい。僕たちはそんなものは何もありませんから、こんなも  
んではないです」と言われると、「これでは、日本の先行きは大変だぞ」と思うのです。

日本では昔から、「資源はない。人が資源です」と言われてきました。ところが、安全

第一主義とか、お上り賞味期限を決めたり、いろいろな規制を決めたりして、自分で考  
えない人を増やしてしまつた。テレビを観ていると、情報が山のように入ってくるけれど、  
ほとんど思考停止の状態になっていて、やる気も出なければ、挑戦もしない。挑戦してだ  
めだった時に再挑戦の場がないというのは、本当によくないことだと思います。安倍さん  
は最初の頃、「再挑戦の場」と言っていたので、とてもいいと私は思っていたのですが、  
この頃はそんな話は全然なくなっています。

この頃は、「女性が輝く社会」と言っていますが、女性だけが輝くなんて無理なのです。  
男が輝かなければ、女も輝けないのです。働く女の人が夕方5時に保育所に行きたいと思  
つても、男の人が働いているから、なかなか早く帰れない。男の人でも5時に帰れるよう  
な生活なら、みんながハッピーになるはずですが、5時でも働いている人が多いから  
困つてしまいます。

### ◆日本の将来のために、活力のもとになる「個育て」を始めよう

国と個人を対立するものと捉える人が多いですが、私は、国というのは個人の総  
体であつて、個人一人一人の個が強くならなかつたら、国が強くないし、元気にもな

らないと思っています。では、個が強くなるためにはどうしたらいいかというと、まず自己確認です。アイデンティティです。自分がどういうものであって、どういうことができる、どういふことがしたくて、どこが人と違うのか、どこがいいのかということを自分で自覚することです。そして自己主張をすることです。日本是自己主張をしたらあまりいいことはないのです、黙っている人が多いのですけれども、自己主張をするのは大事なことです。「人と違う私」を、きちんと表現できないと、埋没してしまう。そして、最後是自己責任です。自分で選んだ以上は自分で責任を取る必要があるのです。

基本的には、自分の身を自分で守るのは当たり前で、2歳児なら2歳児ができることを家庭という社会の中でしっかりと果たさなくてはいけません。そうしないと社会は成り立たないと思うのですけれども、みんな依存してしまって、「誰かがやってくれるだろう」「みたいな話になってしまいます。それで、この国の活力みたいなものがどんどん低下していくのだらうなど、私は嘆いています。自分の身の周りの「個育て」、つまり「人と違っていい」という「個」を育てることが大人の役目だらうし、そこに初めて日本の将来があるのではないかなと思います。

特に専門家の方たちは、いろいろな情報をたくさん持っていらつしやるわけですから、

成果がなかなか出なかったとしても、これでもか、これでもかと、情報のない我々に正しい情報を出し続けてほしいと思います。政治家もみんな、国民に耳の痛いことは言いません。これだけ高齢者が多くなって社会保障費が増えているのに、「税金は上げません」と言う。では、どうやって賄っていくのでしょうか。国民を馬鹿にしていると思います。

政治家は、みんなに叩かれる存在で、みんなから「いい」と言われることはないわけです。昔みたいに国民を十把一絡げにして「国民全体が食べられるようにする」みたいな時は、そんなに苦労することはありませんでした。でも、いまのように国民一人一人のやりたいことのベクトルが全然違う時に、政治家が「国民の皆さまのために」と言ったら、「どの国民ですか？」と聞いてほしいのです。一人一人が全然違うのに、「国民のために」と言われて納得していたらだめなのです。これだけバラバラですから、政治家は畳みの上では死ねない、というように、反対派が出るのは当然です。それをどう説得して、決断してリーダーシップを持っていくかということが、政治家の政治家たる由縁なのに、それをやれない。国民は説いても分からない存在だと思われているのは、しゃくしゃくありませんか。私は失礼だと思うのですけれども、民主主義の結果がこうなっているわけです。

## ◆おわりに

これから日本が生き残っていくためには、やはりどう考えても人の力、そして誰にも真似できないような技術を持ち、磨いていくことが必要だと思います。

私の父が言った「一億総白痴化」どころか、世界中が「70億総白痴化」という状況になってきているのかなと思ったりしています。そのなかで一人一人が強くなって、「それは違う。ここはこうだ」と言っていない限りはよくならないだろうと思っています。皆さんもぜひ、ご自分の周りからでけっこうですので、「個育て」を始めていただきたいと思います。

本日は勝手なことを申し上げましたけれども、ご清聴いただき、ありがとうございます。

（本稿は平成28年7月、仙台市において先生が講演された内容を要約し、一部加筆したものです。）

文責 広報部

## 講師略歴

評論家・公益財団法人大宅壮一文庫理事長  
大宅 映子（おおや えいこ）

国際基督教大学卒業後、69年に㈱日本インフォメーション・システムズ（NIS）を設立、代表取締役社長をつとめる（現在は大宅映子事務所に吸収合併）。

NISでの企業や団体の文化イベントの企画プロデュースのかたわら、78年から始めたマスコミ活動では、国際問題、国内政治経済から食文化・子育てまで守備範囲広く活躍し、大所高所からの視野と同時に個人の立場で発言する切れ味のよいコメントが好評である。

これまで多くの審議会委員をつとめ、日本の構造改革に関わっている。2014年1月、日本年金機構の非常勤理事に就任。㈱西武ホールディングス社外取締役。

以上

